2021.10.27

霊長研解体（２）

小嶋祥三

昨日（26 日）、京大総長が霊長研の処分を説明した。新しくできるヒト行動進化研究センターには、高次脳機能（旧神経生理学）、統合脳システム（旧生理学）、ゲノム進化（旧生化学）が移行し、社会生態系は野生動物研究センターと生態学研究センターに、形態系統系は理学研究科、博物館に移る。問題を起こした心理系の２分野は廃止され、わたしが知らない細胞生理分野もいったん廃止する。人類進化研究センター（旧サル施設）は残る。

総長は、所内の連携が悪いと述べたが、研究面では、少なくも私が在職した時は、大分門内、大部門間の連携は盛んだった。例えば、神経生理－心理の連携、神経生理－生理、社会生態－生化学の連携、心理―社会生態の連携などがあったし、現在でも、わたしの研究の一部は形態系統に引き継がれている。同じ実験材料を使うので、連携、共同研究がしやすい環境だった。したがって、総長の言葉は当たらないのではないか。

部門、分野間の垣根の低さは人事にも現れた。わたしは助手（昔の職階で）を心理研究部門で過ごしたが、助教授は神経生理部門だった。大部門制になっても、大部門を越えた人事はみられた。本部の研究科ではそれほど多くないのではないだろうか。このような事実は、調べればすぐに分かることだ。キチンと調査したのだろうか。この面からも早朝の言葉は当たらない。

総長は研究費の問題について述べたが、どの研究機関でも、他の分野の研究費の使い方まで首を突っ込むことは一般的にない。それは通常、各分野と事務がやることだ。したがって、研究費の問題で、当該分野だけでなく、研究所全体が解体されるのはとても理解できない。松沢の件については、業者は 2017 年に裁判を起こしている。すなわち、大学当局は松沢の研究費の使用に問題があるかもしれない、という認識は持てたはずだ。この間、大学は一体何をしていたのか。その点を明確にしてほしい。その責任を、何も知らない霊長研の他の分野に負わせるのは不合理である。

確かに 11 億円の不正使用は巨額である。しかし、松沢は熊本のチンパンジーを引き受けることで巨額の資金を得たと聞く。また、それらのチンパンジーを外部に移し、維持管理費の負担を軽減したとも聞く。不正な研究費の返却にその資金を利用することは考えられないのだろうか。松沢が起こした不祥事である。松沢が得た資金で支払うのが自然だ。

わたしは、今回の案は最初に霊長研解体のゴールを設定し、それに合わせた理屈を無理に組み立てたような印象を持ってしまう。何か他の要因があるのだろうか。